

# アイヌ口頭文芸「聖伝」をめぐつて

奥田統己

## 一・はじめに

### 一・一・本稿の目的

本稿では、まず第一に、北海道西南部の日高地方西部から胆振地方にかけてこれまで「聖伝」として報告されてきた一群のアイヌ口頭文芸について、そのジャンル分類を再検討する。そして、先行研究の整理と音声資料の分析に基づいて、これまで多くの論が「人文神譜」としてきたこの聖伝は「人文神の神譜」と「人文神の英雄叙事詩」の二種類に区別して考るべきであることを論じる。

ついで、北海道の東北部において、日高西部および胆振の聖伝にあたる物語としてどのようなものがあるかを考察する。そして資料調査が不十分な段階での仮説としてではあるが、北海道東北部の英雄叙事詩のなかに日高西部および胆振の人文神の英雄叙事詩にあるものがあること、また全道的には人文神の英雄叙事詩のほうが人文神の神譜よりも幅広く存在することを推定する。

アイヌの口承文芸・オンネパシクルについては、今年度の本学会大会の研究発表（大谷洋一「アイヌの口承文芸・オンネパシクルについて」）でも論じられている。したがって本稿では、これまでの研究と同じく口演形態上の区分

## 一・二・ジャンル分類の基準・地域区分

を重視しながらも、形態と内容として語り手による呼称というジャンル分類の大きな三つの側面をできるだけ区別して行く。

また本文中では「日高地方西部」は新冠町・門別町・平取町を、「沙流地方」は門別町・平取町を、「胆振地方」は登別市(幌別)をそれぞれ指して用いる。「北海道東北部」は、よりおおまかに、帶広地方以東および上川地方以北を指す。

## 二・先行研究

### 二・一・聖伝を神謡の下位ジャンルとする説

知里真志保(一九六〇、一二二一一二三ページ)は神謡と聖伝の二つのジャンルについて次のように述べている。やや長くなるが、問題となる分野の概観を兼ねて引用する。

ふつうに神謡と云えば、「人間のユーカラ」(英雄詞曲および婦女詞曲)に対して、「神々のユーカラ」をさす。しかしその神々のユーカラも、その物語の主人公によって、2種類に分けることができる。一つはその主人公として動物や植物、舟や錨などの物語り、若い女神を魔神の窟から救い出して、人間文化の基を開くと共に、その女神と結婚する筋書き(中略)

(1) カムイオイナ (kamuy-oyna) (中略) オイナカムイの出自を物語り、若い女神を魔神の窟から救い出して、人間文化の基を開くとともに、その女神と結婚する筋書き(中略)

(2) ポロオイナ (poro-oyna) 日神が悪魔に囚われて世界が闇になるのを人文神オイナカムイが回復する勇壮な物語。(中略)

(3) ポンオイナ (pon-oyna) 人文神オイナカムイが(中略)コタノコルカムイ(中略)の妹を妻訪いし、その許嫁の夫であるポロシリ岳の神と争う物語(中略)

これら3種のオイナは、その結構の雄大さ、その形の長大なこの種類は、そういう自然神でなく、人文神(これはオイナカムイ、アイヌラックル、サマイクル、オキクルミなど種々の名称で呼ば

れる)が主人公として出て来て自分の体験を語るものである。それをここでは「人文神謡」(引用者注:以下(2)と参照される)と呼ぶておく。(中略)

広い意味の神々のユーカラ、すなわち神謡と云えばこの(1)および(2)を含めて呼ぶのである。かくて、北海道の中東北部から樺太へかけては、この2種類を区別せず、たとえばオイナという語は自然神謡と人文神謡のいずれをもさすのである。しかるに胆振および日高の沙流地方では(1)と(2)とを厳密に区別し、(1)を「カムイユカル」、(2)を「オイナ」と呼ぶのである。すなわち、この地方でオイナと云えば範囲がずっと狭くなり、(2)の人文神謡だけをさすのである。内容が特に重大な信仰の物語になつてゐるというので金田一博士はそれを聖伝と訳されている。この聖伝 すなわち人文神謡の内から、さらに次の3種類を区別する。

いくらいである。その形式も、普通にオイナと称せられるものは神謡と同じく、サケヘ（折返し）を以て歌われる。

つまり知里（一九六〇）は、メロディーを伴う物語をまず「神々のユーカラ（神謡）」と「人間のユーカラ」とに分類する。そしてここで問題としている「聖伝」は神謡のなかに含めている。なお「折返し」というのは、個々の物語に固有なりフレインであり、知里（一九六〇、一二一ページ）によれば「神謡の形式上の第一条件」である（以下の本稿では「折返し」ではなく「折り節」という用語を用いる）。

また右の引用のなかで「主人公として」というところに注意する必要がある。これまでの通説として

他の神（中略）が一篇の主役となつて自叙すれば、たとえ、アイヌラックル（オキクルミ）がその中に現われて来ても、それは「神謡」であつて「聖伝」とは呼ばない（久保寺（一九七七、一二二ページ））

とされるのである。

なお知里（一九六〇、一二三一一五ページ）は英雄叙事詩について

これは人間の英雄を主人公とする比較的長編の叙事詩で、地方によって名称と主人公を異にする。

（一）ユカル（中略）胆振、日高の沙流、および天塩ではもつばら人間のユーカラ、特に英雄詞曲をさす。（中略）

ユーカラの口演は男も女もする。演者は一尺くらいの棒の一端

を右手に握って坐り、一句ごとに炉縁を叩きながら歌つて行く。と述べている。この「一句」とに炉縁を叩く拍子が、英雄叙事詩の口演形態の特徴のひとつともれる。

知里（一九六〇）と同様の説明は久保寺（一九七七）にも次のようみられる。

聖伝Oinaなる語は、広義に解すれば、第4章で述べた神謡Kamui-yukarに属するものであるが、北海道南部の胆振・日高地方では「神謡kamui-yukar」に属するもののうち、特に、アイヌの始祖として、天の國より下士に降臨して、アイヌ文化の基を開いたと信じられているAeina-kamui（我等の言い継ぎ、語り伝える神）（中略）の自叙になるものを特に、神聖視して、そう呼んでいる。（一二〇ページ）

「聖伝」を伝承詩人が諷誦する場合も、いわゆる狭義の「神謡」同様に、「折り返しの囁詞sakaehe」を挿入していく点では、全く同じである。（一二二ページ）

近年の研究でも、たとえば萩中（一九九一、三三一六一三二七ページ）は

広い意味のアイヌのユーカラは「神々のユーカラ」と「人間のユーカラ」に大別できるが、今一般にユーカラといえば人間のユーカラ、いわゆる英雄叙事詩のほうをさすようになった。

それは（中略）日高の沙流地方の呼称法によるもので（中略）またここでは（中略）人文神のユーカラをオイナoynaと呼ぶ。

としたうえで、〈神々のユーカラ〉の項の最初に「人文神のユーカ

ラ」をとりあげて

ただ、人文神のユーカラに共通しているのは、ストーリーの組立てや運びが後に記す「人間のユーカラ」に似ている。とくに語りの出しを文字にしてみると、どちらか迷うほどであるが、語り口と内容に違いが見られるほか、人間のユーカラにはない折返しがつく。

と述べている。

また金田一（一九五九、三一四ページ）は

さて、ユーカラに二種あり、一つは英雄のユーカラ、今一つは神々のユーカラである。（中略）神々のユーカラの内に、オキクルミ神が悪神を征服する自叙体のものは、やゝ長い。また、アイヌラックルの自叙体に歌うものがあつて、これは、特にオイナ「聖伝」と呼ばれて、アイヌ宗教の聖典を成す物語であつて、凡そ神々のユーカラの最も発達した長編である。

としている。しかしここでは折り節の有無についてはふれていない。

## 二・二・右と異なる説

ところが金田一京助の主著（一九三二）での記述は、右の諸説とは少なからず異なっている。そこで金田一はまず

その形態が、全然ユーカラに似て、謳われる内容が重大な信仰上の物語になっているものに、オイナと呼ばれるものがある。沙流アイヌは、オイナもカムイユーカラだというように云っている

が、（中略）又一方には、オイナを特に少数に限る地方があつて、必しも一樣でない。（二〇九ページ）

と述べている（金田一（一九三二）では単に「ユーカラ」とあるのは英雄叙事詩を指すと考えてよい）。そのうえで神伝（カムイオイナ）大伝（ボロオイナ）小伝（ボンオイナ）の三つの聖伝をめぐつて

神伝・大伝・小伝は、みなその冒頭が、ユーカラの如くに『オイナかユーカラか、どちらかわからない』程である。ただ内容が、神事になって来て、オイナカムイらしい現じ方になって始めて、オイナだとわかる程である。その他、神譜の中のオキクルミの自叙の物語は、多く、そういう形を取るが、但しサケヘがあるから、神譜らしい匂いが初から明瞭なのである。沙流の人々のようにこれらをオイナとすると、カムイユーカラとオイナとの境は、形の上では全然ぼかされてわからない。（二一二ページ）

としている。つまりオイナと呼ばれる物語のなかには神譜に含まれているものもあるが、いっぽうで少なくとも神伝・大伝・小伝の三種は英雄叙事詩に類似し、折り節も伴わないことを明記しているのである。そしてこの時点での金田一の記述のなかには、知里（一九六〇）や金田一（一九五九）などのような聖伝を神譜の下位ジャンルだとする考えはみられない。

また知里のより古い時期の記述（知里（一九四八、三一三ページ））を知里（一九六〇）と比べると、聖伝についての類似した記

述のあとに、知里（一九六〇）では削られている「この神伝・大伝・

小伝は、英雄叙事詩のごとく、折返しが付かずに歌われる。」とい  
う一文がみられる。同様の文は知里（一九五五、一一九ページ）に  
もある。

また久保寺（一九七七）にも右の引用部のあとに（二三八ページ）

私の採集した「聖伝」について見るに、16篇は囃詞を伴ない、残  
りの7篇には囃詞を欠いている。7篇中には、伝承者がはつきり  
と「英雄詞曲」のような節付けで歌う（Shinotcha-ki）といった  
ものもあるが、本来伴なっていた囃詞が忘れられてしまつたもの  
もあるかも知れない。

と述べている箇所がある。

## 二・三 問題の所在

右の先行研究を簡単に整理してみる。まず全体のジャンル分類を  
みると、金田一（一九三一）が聖伝を神譜の下位ジャンルとしてい  
ないのに対し、知里（一九四八）、金田一（一九五九）、知里（一

九六〇）、久保寺（一九七七）、萩中（一九九一）はいずれも聖伝

を神譜の下位ジャンルとして扱っている。また口演形態について

は、金田一（一九三一）が特に神伝・大伝・小伝の三種について英  
雄叙事詩に類似しているとし、知里（一九四八）も形態上の基準の  
一つとなる折り節をこれら三種は持たないと述べている。これに対  
し知里（一九六〇）と萩中（一九九一）は折り節のない聖伝の存在を  
示さず、久保寺（一九七七）も一般に聖伝は折り節を伴うとした

うえで、これに反する口演例の存在を小さく評価している。

このように、聖伝の口演形態さらにはジャンル分類をめぐって  
は、これまでの主なアイヌ口頭文芸の研究者のなかで意見が分かれ  
ているだけでなく、同じ研究者の説のなかに若干の食い違いがみら  
れることもあるのである。

これらの文献を参照して周辺の諸民族との比較などを行った研究  
にも、こうした状況は影響を与えていた。たとえば大林（一九八八、  
四一ページ）は久保寺（一九七七）をよりどころとして「オイナは  
ふつうリフレイン（サケヘ）をつけて吟誦される」としている。いつ  
ぱう荻原（一九八四：一九二）はジャンル分類、口演形態とともに二・  
二・で示した説に従っているのである。

そこで以下の本稿ではまず、聖伝の口演形態が事実としてどうで  
あつたのかという問題について、資料に即して考察する。そのうえ  
で、聖伝のジャンル分類について改めて検討する。

## 三・日高西部・胆振の聖伝

### 口演形態とジャンル分類

二・一・に示した知里（一九六〇）の記述から読みとれるとおり、  
神譜と英雄叙事詩の口演形態をもつとも明白に区別するのは折り節  
と拍子の有無である。また神譜の節回しが個々の物語に固有なこと  
が多いのに対し、英雄叙事詩の節回しは個々の語り手に固有だとさ  
れる。したがって同じ語り手の語ったほかの物語の節回しと比較す

ることができれば、節回しのうえから神謡として語られているか英雄叙事詩として語られているかを推定することもできる。以下ではこれらの点から文字資料と音声資料とを検討する。

### 三・一 文字資料

金田一（一九二三）は新冠のトメキチ（サンキロッテ）さんによる大伝と神伝、平取町の鍋沢タウクノさんの「古伝」三篇、あわせて五篇の「オイナカムイの説話」の対訳を収めており、いずれにも折り節を示していない。同書が「神謡」として収めている三篇にはすべて折り節が示されているので、これら五篇の聖伝には折り節はなかつたと考えてよい。

知里幸恵（編、一九二三）は「小オキキリムイが自ら歌つた謡」を折り節をつけて対訳している。登別市の伝承と考えられる。

金田一（一九四三）は、知里幸恵（編、一九二三）からの参照と樺太・長万部のもの、および「昔話」などと明記してあるものを除き、あわせて三八篇の和訳ないしあらすじを示している。そのうち折り節が示されているのは、神伝・大伝・小伝とその類話一二篇中の二篇、その他の物語二六篇中の一四篇であり、いずれも鍋沢タウクノさんをはじめとする沙流地方の語り手による。ただし三八編のうち金田一（一九二三）に収録されている神伝・大伝・古伝あわせて四篇、また金成（筆録）金田一（訳注）（一九五九）に対訳で収められている登別市的小伝が他の資料と重複する。またなかには人文神の自叙でないものもあるようである。

金成（筆録）金田一（訳注）（一九六一）が掲載している六篇の「ボロオイナ」「カムイオイナ」にはすべて折り節が示されていない。なお他と重複していないのは門別町の平賀ヤイブニレ（エテノア）さんの口演による「カムイオイナ」一篇である。

久保寺（一九七七）に収録されている一八篇の聖伝のうち、口演の際に折り節を伴つたものは一一篇、語り手が「忘れた」とした折り節を久保寺が推定しているものは二篇、「伝承者亡失」とあるのは二篇、「不詳」とあるのが三篇である。いずれも沙流地方の語り手による。

### 三・二 音声資料

文字記録に折り節についての記載がないことは、口演の際に折り節を伴わなかつたことを直ちに意味しない。記載もれの可能性もあり、また調査の際に節回しをつけずに内容だけを語つてもらい、結果として折り節も記録されなかつたかもしれないからである。また折り節以外の口演形態、すなわち拍子の有無や節回しについては、これらの記録からはうかがうことができない。

そうしたことを調べるには、実際の音声の記録にあたらなければならない。折り節を伴つているものを除いて、筆者が聞くことのできた口演の録音は左のとおりである。

- A 登別市の金成まつさん（一八七五—一九六一）によるもの  
（日本放送協会（一九四八）所収）

一九四七年口演。物語の一部のみの録音ではあるが、「ポン・オ

イナPon-oyna」という標題が付されており、知里（一九六〇）の示しているポンオイナの類話だと推定される。知里（一九四八）はこの録音を含むアイヌ歌謡レコードの解説である。またこの語り手自身による筆録が金成（筆録）金田一（訳注）（一九五九）に収められている。

B 門別町の平賀サダモさん（一八九五ごろ—一九七一）によるもの（田村（一九九二）所収）

一九五八年口演。田村による解題にはこのユーカラは、人間の始祖、アイヌラックルの素性が明らかにされる物語で、金田一京助・久保寺逸彦氏らの著書で「オイナ」として紹介されている種類のものである。しかし、語り手のサダモさんは、「オイナ」という呼び名を用いず、yukarと呼んでいた。

とある。知里（一九六〇）によるカムイオイナの類話である。

C 静内町の葛野辰次郎さん（一九〇九）口演（静内町教育委員会所蔵の未公開の録音による）

一九八五年「静内町ユーカラのタベ」での口演。静内町は新冠町の東隣に位置し、アイヌ語の方言ながらみると北海道西南部と東北部との境界地域にある。録音のなかで葛野さんはこの物語を「オイナウチャシクマユカラ」としている。アイヌラックルカムイエカシが天を治める神に命じられて下界の人間に語り手自身によるあらすじの説明がある。

これらを聞いてみると、いずれも折り節はなく、また拍子が打たれているのを聞き取ることができる。またこの三人の語り手による英雄叙事詩の口演は、いずれもそれぞれこれらの口演と節回しが類似している。

### 三・三 日高西部・胆振の聖伝のジャンル分類案

右の検討から、日高西部・胆振地方の「聖伝」と考えられるアイヌ口頭文芸のうち、神伝・大伝・小伝に限らず少なからぬものはむしろ英雄叙事詩と同じ口演形態をとつて語られるべきと考えることができ。しかしいっぽうで確かに、折り節を伴うなどして神謡と同じよう語られるものも存在する。（つまり口演形態の点では、金田一（一九三二）の記述のほうが知里（一九六〇）などより正確であつたことになる。）

こうした事実を踏まえると、聖伝を一概に「人文神謡」という神謡の下位ジャンルに位置づけるような知里（一九四八）以降の分類は危険だと考える。聖伝が口演形態のうえからも神謡と同じだとう誤解を招きかねないからである。これは推測に過ぎないが、こうした分類がその後知里自身や久保寺らをも束縛して、口演形態の上からも神謡と聖伝が一律に同じだとされるようになつた可能性もある。

このことから本稿では、これまで「聖伝」ないし「人文神謡」などとされてきたジャンルを口演形態のうえから「人文神の神謡」と「人文神の英雄叙事詩」とに二分することを提案する。そして人文

神の神話は広義の神話の、また人文神の英雄叙事詩は広義の英雄叙事詩の、それぞれ下位ジャンルだとする。なお人文神以外の人物が自叙者となる英雄叙事詩を特に指 ときには「人間の英雄叙事詩」と呼ぶことにする。

この場合に問題となるのは、内容上類似した物語を別のジャンルに分類すべきかということであろう。しかし一・二・で述べたとおり、これまでのアイヌ口頭文芸の分類でも口演形態は第一の分類基準となってきた。そして内容の類似している物語でも、例えば神話と散文説話とに別々に分類されることがあつたのである。

またここで注目すべきなのは、沙流地方では聖伝の範囲が広くなり聖伝と神話の形式上の境界もぼかされるとする、金田一（一九三一）の記述である。右でみたうち、人文神の神話の記録は門別町および平取町下・中流域、すなわち沙流地方の中下流域に集中している。そして他の地域の資料の数は全体がごく少なく、ほとんどが人文神の英雄叙事詩である。この点についても金田一（一九三一）の記述は的確だったと考えられる。

#### 四・北海道東北部の「聖伝」について

以下では、北海道東北部での聖伝について若干の考察を行い、そのうえで北海道全域の聖伝についての筆者の考えを述べる。ただし現在のところ北海道東北部についての筆者の調査は不十分であり、その意味でここでは仮説の提示にとどまっていることをお断りす

る。

##### 四・一・北海道東北部の人文神の神話

知里（一九六〇）は先に引用したように、北海道の中東北部から樺太にかけては「人文神話」が「自然神話」と区別されないかたちで存在すると述べている。また秋中（一九八七、三八九ページ）は

北海道では（中略）たとえば旭川や白糠などでyamaといえれば、人文神が語るほうではなく、いわゆる自然神話をさすし、両方の神話をいう地域もある。

としている。さらに浅井（一九七二、二六一ページ）は北海道東北部の口頭文芸を収めた文献の解説のなかで

「オイナ」[oya]前記の「神話」に属する。主人公は動物を主体とする自然神であることが多いが、火の神やいろいろな名で呼ばれる神人（半神半人）のこともある。

また藤村（一九八〇、一三七一三八八ページ）は全道を対象として神々の物語とは動植物、器物、自然神と人々に知恵を授けた人文神（中略）らが自らの体験を歌い語るもので、

とそれぞれ述べている。なお金田一（一九三一）と久保寺（一九七七）は、聖伝については日高・胆振以外の地方を考察の対象としていない。

しかし現在の筆者の調査の範囲では、折り節を伴い形態のうえから神話とみられる物語で知里（一九五二、二〇三一一〇九ページ）が異名を示している人文神が自叙者となっているもの、つまり人文

神の神話の例は北海道東北部には少ないようである。多少ともまとまつた報告としては知里（一九六一）が三篇の「オアイヌオルシリル自演の神話」を收めているにとどまっている。

#### 四・二 北海道東北部の人文神の英雄叙事詩

いっぽう三・三で述べた結論に基づけば、北海道東北部での聖伝を考えるときには、いわゆる神話だけではなく形式上からは英雄叙事詩とすべきものにまで視野を広げる必要があることになる。ここで北海道東北部の英雄叙事詩の資料をみると、日高西部・胆振の聖伝と内容上類似しているものが少なからずみいだされるのである。例えば次のDは旭川市の英雄叙事詩であり、いっぽうEは平取町の聖伝である。

D 旭川市杉村キナラブックさん（一八八八—一九七四）によるもの（北海道教育委員会、一九七九）

口演時期は不明。「イルバエ（オッカイ ユーカラ）」とあら。

姉と暮していたが始めて外へ出て、歩いて行こうとすると、風に乗って飛ぶ、そして大きな沼に出た。どこからか唄う声がするのでそっと探すと、沼の辺りに一人の美しい女が乳房を出して天に向け、夫となる雷神に愛の言葉を即興の詩に託し呼びかけていた。私は忍んで行き、後ろから乳房を押えると、女は「夫の雷神が来てお前を殺すであろう」と怒った。間もなく黒い雲から振り下ろされる刀との戦いになつたが、私が勝つ。そ

E 平取町の平目カレピアさん（一八七〇—一九四七）によるもの（久保寺（一九七七）聖伝一七）  
一九三六年口演。折り節は「不詳」とされている。  
して沼神の女を連れ帰つて夫婦となつたと、ポイヤウンペが語つた。

「第1段」アイヌラックルの生い立ち、「第2段」アイヌラックル初めて山狩りに赴き、里川の水源にある沼の畔に出で、その美景を眺めている。「第3段」沼の畔に歌を歌う美女の肌を見て、アイヌラックル忍び足にて近づき、その懷をはずかしめる。美女の沼の女神、己が身は西浦の神の妻なること、かかることをした以上、西浦の神の嫉妬を招き、戦を仕掛けらるべきことを、アイヌラックルに物語る。「第4段」西浦の神と闘い、アイヌラックルこれを斃して、帰途につく。「第5段」家に帰り来て、アイヌラックル養姉より叱られる。アイヌラックル、女神に恋するあまり、物を食わずに寝てばかりいる。「第6段」或る日、沼の女神訪れ来て、アイヌラックルと同棲する。これらの物語のように地上以外の世界に住む悪神や化物などが主な自叙者に敵対することは、日高西部・胆振地方の聖伝にはよくみられる。しかしこの地方の人間の英雄叙事詩のなかにはそうした例はあまりみられない。特にその悪神などが人間の英雄叙事詩全体のなかでの主要な敵となることは少ない。これに対し北海道東北部の英雄叙事詩とされる物語では、右の例Dや次の例Fのように物語全体の主要な敵が人間ではなく悪神や化物であることが少くないよ

うである。

F 鶴居村（釧路地方）の八重九郎さんによるもの（北海道教育委員会（一九七八））

同年ころの口演。「sa-kor-pe」とある。

kanna-kamuy（原注：雷神）にiwan（原注：6）兄弟がいて、妹に金の鳥の姿をさせ、人間たちを次々に殺していく。神たちがそれを見て、何人も征伐にくけれど、あべこべに殺されてしまい、nish-or-utar（原注：雲の中にいるひと（神）たち）やkamu-y-utar（原注：神々たち）たちがだんだん少なくなつていった。

pon-ofasut-in-kurは、抜けば、火が出る刀をはき、毒矢を入れた矢筒と弓とをもつて出かけていくことにした。「神々よ、わたしが、これから金の鳥を退治にいきます。どうぞおしずまりください。」といって、雲に乗つて天に上つていった。見ると、たかのような大きな金の鳥が、ぐるぐると飛んでいた。全身金だから、せつかくの刀も、また毒矢も役に立ちそうにはない。どうしたものかと思案していると、かすかに脇の下が見えた。ここだ、と思って矢を射ると、うまく当つて、のびてしまつた。それからkanna-kamuyの兄たちに向つてcharanke（原注：談判）し、あやまひせて、わが村、オタスコタノにもどってきた。

なお拙稿（一九九五）では、静内町の織田ステノさんの語る英雄叙事詩でもしばしば地上以外の世界に住む悪神などが敵対者となることを指摘した。先に述べたとおり静内町は日高西部と北海

道東北部との境界地域であり、織田さんのレバートリーはこの点で、より東側の地域と共通点を持つていているとも考えられる。

また萩中（一九八七・三九〇）は

釧路の春採出身の八重九郎（一八九五—一九七八）によれば、人間のユーカラ（釧路ではsakorpeという）に現れるヒーローよりも、めうとえひい神、アイスピボンペヤイエユーカラカムイayupipo npe yaveyukar kamuy（アイヌの若者が自らを物語る神）が主人公となつて語るものyukarといい、人文神のユーカラに相当する。

と述べている。北海道教育委員会（一九九三）には八重さんが語ったユーカラの断片が収録されており、同書の編集の過程で筆者が録音を聞いた限りでは、その節回しは英雄叙事詩に類似している。このことでも北海道東北部での人文神の英雄叙事詩の存在を示唆する。

#### 四・三・聖伝の主な自叙者

金田一（一九三一、二一一ページ）は日高西部・胆振地方での聖伝の主な自叙者をめぐって次のように述べている。

尚、日高の方では、神譜のヒーローのオキクルミが、全然オイナのヒーローのアイヌラックルと同一になつてゐるが、地方については、又別の存在ではないかと考えてるものもあるらしい。

また久保寺（一九七七、二二ページ）も次のように述べている。「アイヌラックル」「オイナカムイ」「アエオイナカムイ」を同一の神とすることは、まず問題はないものとしても、これらが

「オキクルミ」と同一視すべきかどうかは、疑わしい。地方によつては、「オキクルミ」自叙のものを「神譜」とし、「アイヌラックル」自叙のものをのみ「聖伝」と呼ぶ。私の採集筆録した「聖伝」は全部道南日高・沙流のものであるから、「アイヌラックル」と「オキクルミ」とを同一視する傾向の強い沙流人の考え方につつて、しばらく、「聖伝」として取り扱うこととした。

これらの記述は、アイヌラックルとオキクルミとは本来別の人事物であり、それが沙流地方で習合したことを見唆している。

これに對し知里（一九六〇）は二・一・で示したとおり、北海道全域を視野に入れながら、聖伝の自叙者の名として「オイナカムイ」「アイヌラックル」「サマイクル」「オキクルミ」などを示している。さらに知里（一九五二）はこれらの名称を括して扱いながら、アイヌ口頭文芸の起源を論じている。

しかし北海道東北部では、サマイクル（サマイエクル）は多くの場合自然神などが自叙者となる神譜の登場人物として現れ、本人が自叙者になることは少ないようである。そして北海道東北部の英雄叙事詩で多くの場合自叙者となるオタストゥンクル、オタサムンクルなどの人物は、日高西部・胆振の英雄叙事詩の自叙者に比べて、より半神半人的な性格を持っているようである。例えば北海道教育委員会（一九八九）のなかで八重九郎さんは

実際、まあ神様に近いというボノシタス（引用者注：八重さんの英雄叙事詩の自叙者）ともいい、ヤイエユーカラカムイあるいは、アイヌボンベ、ヤイエユーカラカムイ（ちゅう言葉も色々にいいま

すが、（一九八一）

と語つてゐる。（ただし四・一・に述べたように、北海道教育委員会（一九九三）で八重さんはアイヌポンペヤイエユーカラカムイは英雄叙事詩の自叙者よりもさらに格の高い人物だとしている。）

#### 四・四・北海道全域についての仮説

すでに荻原（一九九四、六九八一）は、久保寺（一九七七）らの説を引きながら

誤りを恐れず推論を述べれば、かつてアイヌには、サケヘや一人称の叙述体をもたない「アイヌラックルの神譜」のサイクルがあつたのではないかと考えられる。サケヘと一人称叙述体は、神譜に固有の形式で、女性の口誦領域であった。女性たちがそのレパートリーのなかに「アイヌラックルの神譜」をとり入れ、サケヘと一人称叙述体のスタイルに編曲した時に、いわゆるオイナが生まれる。

と述べてゐる。

これに對し筆者は、右の考察に基づき次のようないかの仮説を持つてゐる。すなわち、人文神の英雄叙事詩にあたる物語は、北海道東北部を含め全道的に広く存在する。その口演形態は一般的の英雄叙事詩と同じであり、折り節は伴わないが自叙体（一人称叙述体）をとる。そして日高西部・胆振では神話的内容を持つ英雄叙事詩を人間の英雄叙事詩からジャンル呼称のうえでも自叙者の名称でも区別するが、北海道東北部ではあまり明瞭に区別しない。いっぽう人文神の

神話は多くの地域では限られた話型のみが存在し、その自叙者は人文神の英雄叙事詩とは異なっている。ところが沙流地方中下流域などでは、人文神の英雄叙事詩の自叙者であるアイヌラックルと人文神の神話の自叙者であるオキクルミとが習合し、その結果として「人文神の神話」が数多く生み出された。

この仮説の真偽は、今後北海道東北部さらには樺太の英雄叙事詩や神話の分析を進めば、ある程度まで明らかにしうると考えていい。その過程では、日高西部・胆振の聖伝にみられるような創世説話的要素などがどの程度他の地域に分布しているかなども検討しなければならないだろう。

#### 参考文献

- 奥田 統己（一九九五）：「織田ステノの英雄叙事詩」、『口承文芸研究』一八・八五・九八。
- 金成まつ（筆録）金田一京助（訳注）（一九五九）：『アイヌ叙事詩』ユーカラ集I “PON OINA”（小伝）』、三省堂。
- （一九六一）：『アイヌ叙事詩』ユーカラ集II “POINA”（大伝）』、三省堂。
- 金田一京助（一九二三）：『アイヌ聖典』、世界文庫刊行会。
- （一九三一）：『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究 第一 冊』、東洋文庫。
- （一九四三）：『アイヌの神典 アイヌラックルの伝説』、八洲書房。
- （一九五九）：「金成まつユーカラ集」解題、金成（筆録）金田一（訳注）（一九五九）一一〇ページ。
- 葛野辰次郎（一九九〇）：「カムイとアイヌ」、札幌学院大学人文学部（編）『アイヌ文化に学ぶ』「公開講座」北海道文化論、三〇・六六ページ。
- 久保寺逸彦（一九七七）：『アイヌ叙事詩 神話・聖伝の研究』、承の比較研究「4」、弘文堂 四〇・一五七ページ。
- 岩波書店。
- 田村すず子（一九九一）：『アイヌ語音声資料7 一サダモさんのユーカラ 1—KOTAN SITCIRE MOSIR SITCIRE 1 村二二二』。
- （一九九四）：「オイナの神話 一巫者論に寄せてー」、『アイヌ語の集い 《知里真志保を継ぐ》』、北海道出版企画センター、四九・一七一ページ。
- 版企画センター、四九・一七一ページ。

- 奥田 統己（一九九五）：「織田ステノの英雄叙事詩」、『口承文芸研究』一八・八五・九八。
- 金成まつ（筆録）金田一京助（訳注）（一九五九）：『アイヌ叙事詩』ユーカラ集I “PON OINA”（小伝）』、三省堂。
- （一九六一）：『アイヌ叙事詩』ユーカラ集II “POINA”（大伝）』、三省堂。
- 金田一京助（一九二三）：『アイヌ聖典』、世界文庫刊行会。
- （一九三一）：『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究 第一 冊』、東洋文庫。
- （一九四三）：『アイヌの神典 アイヌラックルの伝説』、八洲書房。
- （一九五九）：「金成まつユーカラ集」解題、金成（筆録）金田一（訳注）（一九五九）一一〇ページ。
- 葛野辰次郎（一九九〇）：「カムイとアイヌ」、札幌学院大学人文学部（編）『アイヌ文化に学ぶ』「公開講座」北海道文化論、三〇・六六ページ。
- 久保寺逸彦（一九七七）：『アイヌ叙事詩 神話・聖伝の研究』、承の比較研究「4」、弘文堂 四〇・一五七ページ。
- 岩波書店。
- 田村すず子（一九九一）：『アイヌ語音声資料7 一サダモさんのユーカラ 1—KOTAN SITCIRE MOSIR SITCIRE 1 村二二二』。
- （一九九四）：「オイナの神話 一巫者論に寄せてー」、『アイヌ語の集い 《知里真志保を継ぐ》』、北海道出版企画センター、四九・一七一ページ。
- 版企画センター、四九・一七一ページ。
- （一九五二）：「呪師とカワウソ」、『北方文化研究報』

告』七・四七一八〇。

（一九五四）：「アイヌの神謡」、『北方文化研究報告』九・一一七八。

（一九五五）：『アイヌ文学』、元々社。

（一九六〇）：『アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究』、文部省文化財保護委員会。

（一九六一）：「アイヌの神謡（二）」、『北方文化研究報告』一六・一一三四。

知里 幸恵（編）（一九二三）：『アイヌ神謡集』、郷土研究社。

日本放送協会（一九四八）：『アイヌ歌謡集第一集』SPレコード PR167' ノロンビア。

萩中 美枝（一九八七）：「アイヌの口承文芸オイナ」、『国立民族学博物館研究報告別冊』五・三八九一四〇七。

（一九九一）：「アイヌの文化」、『日本民俗研究体系 第一巻 方法論』、国学院大学三一五—三三三ページ。

藤村 久和（一九八〇）：「ヘ神語り／昔語りへの新しい視座 アイヌ」、『国文学 解釈と観賞』四五巻一二号・一三五一一三九ページ。

北海道教育委員会（一九七八）：『昭和五二年度 アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（無形民俗文化財3）』。

（一九七九）：『昭和五三年度 アイヌ民俗文化財緊急調査報告書（無形民俗文化財4）』。

（一九八九）：『アイヌのくらしと言葉1』（アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ2）。

（本文中で金田一京助・知里真志保の著作を参照したページ番号は  
それぞれの全集・著作集による。）  
（おくだ・おさみ／札幌学院大学人文学部）  
（おぐだ・おさみ／八重九郎の伝承）（アイヌ民俗文化財  
口承芸術シリーズ）